

荒地に花を咲かせる

旭岳の裾合平周辺では、裸地化した登山道ののり面が年々拡幅していた。その補修のため、去年の夏のり面保護の椰子（ヤシ）ネットを張った。

1年経った今夏現場を訪れてみると、微小な葉をつけたチングルマやエゾコザクラが随所で根付き、中には開花している株もあった。今後順調に育つかどうかは経過観察してみないと分からないが、作業した者としては手応えを感じさせる光景だ。

「たまには山へ恩返し」の作業は7年目を迎え、今年は大きな広がりとなってくれた。黒岳、愛山溪、原始ヶ原では、市民参加の登山道修復イベントを行った。特に黒岳での修復作業は約60名が参加して一大イベントになった。

昨夏、4つの台風が次々と北海道を襲って、黒岳の雲ノ平では流水によって登山道ののり面が大きく削られてしまった。削られ、流れ出た土砂がお花畑に流入して植物帯を埋めていた。

復旧のためには、植物帯を厚く覆う土砂を取り除き、土嚢（どのう）袋に詰めて本来の場所に戻さなければならぬ。単純だが人手が必要な作業だ。

7月29日朝、一行は黒岳7合目を出発した。山頂を越えて黒岳石室に集結。土砂を取り除く「植物レ



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然ガイドなどで活躍する人々をリレーしています。



植物帯を覆った土砂取り除き作業（7月29日、黒岳・雲ノ平周辺で）

スキュー隊」、土砂の詰まった土嚢袋を運搬する「歩荷隊」、土嚢袋を積み上げる「崩れを止め隊」の3班に別れて作業を開始した。

お昼をはさんで4時間ほどで、大きく削られたのり面に次々と土嚢袋を積み上げて予定どおり作業を終了。大量の土砂すべてを取り除くには時間が足りなかったが、レスキューされた植物がどうなっているか、来夏に再び訪れるのが今から楽しみだ。

山樂舎BEAR 佐久間 弘



家族と過ごすラトビアのクリスマス

東川町国際交流員（CIR）

クリスタ・ボグダノヴァ

8年前に初めて日本にきた私、初めてクリスマスのお祝いや習慣の違いに触れました。日本で初めて過ごしたクリスマスは山形市でした。山形は雪が多くて、ラトビアと同じ「ホワイトクリスマス」でしたが、過ごし方は全然違つて分かりました。クリスマスといえば、



日本では恋人とデートをしたり、友達とパーティーをしたりすることが多いと思いますが、ラトビアでは自宅で家族と過ごす時期です。クリスマスイブに向けて実家に帰って、家族のみんなの家やクリスマスツリーに飾り付けをしたり、クリスマスツリーの下にプレゼントを隠しておいたりします。クリスマスイブは、豆やジンジャーブレッドなど、さまざまなクリスマス料理を作って食べたり、プレゼントを渡したり、家族でゆっくり静かに過ごします。クリスマスは、料理を多めに

作って、クリスマススイブだけではなく何日間も食べられる量を作りますので、「食べ過ぎ祭り」という言い方もあります。ラトビアのクリスマスは、さまざまな料理を作ったり買ったりしますが、日本に来て、「クリスマスケーキ」というものを初めて知りました。ラトビアでは、ケーキは誕生日や結婚式などの祝い日に食べるもので、クリスマスの時に食べる習慣がなく、とてもビックリしました。日本に来てクリスマスは3回、4回と経験しましたが、まだクリスマスケーキにはなかなか慣れません。

日本のお正月は、ラトビアのクリスマスに似ていて、家族と過ごす人が多いでしょう。そしてラトビアのお正月は、逆に日本のクリスマスに似ていて、パーティーを開いたりすることが多いです。